

平成8年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成8年5月29日

高知県病害虫防除所

—アルファルファタコゾウムシ—

本県での初発生を確認

病害虫名 アルファルファタコゾウムシ (*Hypera postica* GYLLENHAL)

1. 特殊報の内容 本県での初発生を確認
2. 初発生の確認された時期 平成8年5月17日
3. 発生場所 高知市 横浜
4. 発生作物 カラスノエンドウ、ウマゴヤシなどのマメ科植物
5. 発生確認の経緯と発生状況

アルファルファタコゾウムシは、ヨーロッパ原産の害虫であり、我が国では、昭和57年に福岡県と沖縄本島で初めて発生が確認された。それ以後は、九州、中国、四国、近畿の一部に発生が拡大し、近県では平成2年に香川県、徳島県、平成7年に岡山県、広島県、島根県、愛媛県で発生が確認されている。

本県では 平成8年5月17日に高知市横浜の雑草地で採集したゾウムシを同日、農林水産省神戸植物防疫所坂出支所高知出張所に同定を依頼したところアルファルファタコゾウムシであることが確認された。

6. 形態

- 1) 成虫: 体長は4.0～6.5mm(図-1)である。頭・胸・腹部の体色は暗褐色から黒色で、脚・触角は褐色から赤褐色である。体表面は灰色がかった鱗片(図-2)で覆われ、背中の中央部は周りよりも濃色となっている。

2) 卵: 俵型で長さ約0.8mmである。産下直後の卵は鮮やかな黄色であるが、次第に暗黄色から緑色へと変化する。ふ化直前になると、幼虫の黒い頭部が透けて見える。

3) 幼虫: 体長は終齢(4齢)幼虫で10mm前後である。体色は、ふ化直後は無色透明であり発育に伴って緑色を帯び、成熟すると濃緑色となる。頭部は若齢から中齢にかけては黒色であるが、終齢では赤褐色になる。背中の中央には1本の白い線があり、生育するにつれて次第に明瞭となる。脚はなく、腹部によく発達したこぶ状の突起がある。

4) 蛹: 終齢幼虫は、白いレース状で球形の繭(約直径6.5mm)を作り、その中で蛹になる。繭は食害植物の茎葉や枯れ葉などに包まれた状態になっている。

7. 生態

発生は年1回である。5～6月に現れた新成虫は、直ちにウマゴヤシ、カラスノエンドウ、シロツメクサ、レンゲなどを摂食後、近くの樹皮下や枯れ草に移動し、10月頃まで夏眠する。11月頃から徐々に夏眠から目覚め、寄主植物を摂食し交尾する。12月から翌年5月にかけて、成虫は寄主植物の茎や葉柄に口吻で卵室を掘り、その中に約10個の卵を塊状に産む。1頭の雌成虫の産卵数は約1,000個である。3月上旬からふ化し始め、寄生植物の若芽や葉を摂食する。4齢を経過した後、4月上旬から茎葉や枯れ草を綴って繭を作り、その中で蛹化し始める(図-3)。

8. 防除対策

- 1) 新成虫が出現する前の4月下旬に耕起し、湛水する。
- 2) 防除薬剤としては豆科牧草にスミチオン乳剤(1,000～2,000倍)、ディブテレックス乳剤(500倍)が、レンゲ(緑肥用)にトクチオン細粒剤F(6kg/10a、開花期まで/1回)が登録されている。
- 3) 薬剤防除は幼虫発生期の3月中旬～4月上旬に行う。
- 4) 養蜂が行われるレンゲ畑では、ミツバチへの影響に配慮し、危害防止に努める。